

「コンペに参加するようになって、力がついてきた」という声を耳にしつつも、今一つその実感がもてない、あるいは、コンペティションに生徒を参加させることに抵抗感が拭えない、という先生方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

今回は、レッスン体系の中にコンペティションを組み込んでいらっしゃる先生方から、コンペティションを継続的に活用していくコツを教えてくださいました。

特集

コンペティションの 継続的活用術

P.3

コンペティションを、なぜ、どのように、レッスン体系に取り入れているのか？
指導者賞の実績を持つ3人の先生方にアプローチ

コンペティションと私

三好のびこ先生 / 長沢あけみ先生 / 江夏範明先生

P.10

コンペティションを継続的に参加することで、得たものは何だろうか？
30名の先生方からコンペティションの上手な活用術をアドバイス

コンペティション継続参加の原点

- コンペティションで、指導者が得るものは？
- コンペティションで、生徒を伸ばすには？





コンペ中のレッスンって、
まるでお芝居を教えているような
気分です

三好 のびこ 先生

静岡県藤枝市

●みよしのびこ／国立音楽大学ピアノ科卒業。
在学中は、故クロイツァー豊子氏に師事。
ピアノ指導歴18年。1987年よりコンペに参加。
連続6回指導者賞受賞。生徒数約80名。

中東遠掛川連絡所主催の入賞者記念コンサートを前にして仕上げのレッスンに訪れたのは、今年C級で本選出場を果たした渡辺真央ちゃん（小4）。レッスンが始まると同時に、テープレコーダーも回り出しました。曲目はショパンのワルツOp.34-2。再現部に入って間もなく、

「自分のものになってないね。曲の雰囲気はずっと同じだから、再現部を聴くの、飽きちゃうよ。」と三好先生からきつい一言。

一緒に弾きながら、冒頭から細かい指示が出されました。「現在」と「過去」の音の響きの違いとそのタッチ法、音を滲ませるためのペダルの使い方、ロマン派らしい左と右の音をずらすタイミングなど、技巧的なアドバイスをはじめ、ショパンの女性観やバレエのステップ、眉毛の上げ方にまで言及しながら、イメージをいっぱいに湧かせて音楽を作っていきます。三好先生の言葉や歌、ピアノにつられるかのように、真央ちゃんの奏でる音楽がみるみる表情豊かになっていきました。

「あの子が出るなら、うちの子も…」

地域性の高さが、ピアノのレベルを上げた!?

「私のこと“大挙して押し寄せ、賞をかつさらっていく、ヒゲの生えたような先生”なんて思われているんじゃないかしら」と三好先生は笑います。

80人もの生徒達は、みな藤枝市近所の子も達ばかり。お母さん達の横のつながりが強く、“あの子が出るなら、うちの子も…”と連鎖反動的に、毎年

多数の生徒がコンペに参加しています。今年のコンペ参加者は、46名にものぼります。

「コンペで結果がダメだった時でも、『こういう結果しか出なかったけど、去年よりこう良くなったから、出してもらって本当に良かった。来年も頑張ります』というのが理想なんですけどね…」

親同士親密であるが故に、結果次第では『みんなについていけないから三好先生の教室にいられない』と言ってくるお母さん方もおり、コンペを続けていくことに悩むこともあったそうです。

音楽の楽しさが分かってほしい、人生に対する前向きな姿勢を身に付けてほしいと、心から願う三好先生にとって、親の性でそのチャンスを摘んでしまうことは耐え難いことなのです。

「だから全員通さなきゃならないんです。ピアノ嫌いにさせちゃったらダメだという生徒1人1人に対する使命感があるから、必死です。参加者を選んできたと思うんですが、性分で出来ないんですよ。」



みな平等に機会を与えて上げたい。親同士のつながりがなければ、私は今のような結果は出ていなかったかも知れません。地域性が高い故にピアノのレベルが上がっているような感じですね。」

コンペに出た子と出なかった子、 12月の発表会でどんと差が出てしまう

46名を全員満足のいく結果へ導くわけですから、三好先生のレッスンへの熱の入れようも半端なものではありません。

まず、「同級の生徒は同じ課題曲」と徹底しています。「今回はこの曲の勉強と決めてしまうんです。比べる人がいないと、私も生徒も親も分からないですからね。それに『あの曲だったら出来たのに』と逃げ場を与えかねませんから。」

毎年出場するまでのパターンに従っていくと、1週間に1回のレッスンでは足りないようで、夏休みになるとレッスンは毎日。特に小さい子は、教えてもくるくる変わってしまうので、朝昼晩という日もあるそうです。

また、練習会も積極的に開いています。譜読みが出来た頃に1回、東京前期(全予選初日)前に1回、7月の予選出場

前に1回、本選出場前に1回という具合に。気持ちが悪くなってきた頃に場を変えて、3者の気持ちを引き締めながら、本番に向け徐々に良い状態に持っていくのです。

「コンペに出ない子は1週間に1回だから、疎外された気分になるみたいね。出た子はそれなりにうまくなってしまい、12月の発表会の時にどんと差が出てしまう…。中には『今年はコンペを止めて、練習曲を進ませます』とおっしゃる方がいて、『そ



上写真：1994年の全国決勝大会に出場した生徒さん達
三好先生を囲んで記念撮影(表彰式会場にて)

れも良い考えですね」とお答えしていますが、進んだためしがないんですよ。」

コンペに出る子と出ない子でレッスンの回数が違うのに「同じ月謝」であることが問題になり、現在は受験月に限り、プラス5000円でレッスンしているそうです。

課題曲のたった8小節、突き詰めて突き詰めていくと、いろんな発見があって面白くてたまらない

地域性が高いといえども、それだけではここまで生徒や親を引っ張っては来れないはず。三好先生の魅力は、レッスンの中でほとぼしる、音楽の教養や興味の広さではないでしょうか。

三好先生のご両親はたいへん音楽好きで、音楽の雑学的なものを吸収しやすい環境にあったようです。子供の頃からバレエやオペラを見るのが大好きだった三好先生は、声楽家のお姉さんの影響で、ピアノ曲よりもオペラのアリアの方がよく知っていたそうです。「今は特別勉強らしい勉強をしているわけではない」とはいうものの、美術展へまめに足を運んだりオペラやバレエのビデオを鑑賞したりする中で、感じ取ることや時代背景から想像することが、ピアノのレッスンに生かしているのでしょう。普段聴くCDは、ピアノ曲はお稽古の音楽として聞こえてしまうので、音楽として捉えたい時はむしろ、歌やヴァイオリンの曲が多いそうです。

「コンペティションを始めて、『シューベルトを弾くなら歌曲を聴かなきゃだめだ』とか『ベートーヴェンは交響曲だ』ってことが分かってきたの。普段のレッスンで、3週日にきたらマルあげて、なんてやっていたら、そんな勉強はしていなかったと思うわ。1つの曲を掘り下げた上で、コンペで様々な視点で評価を書いていただくと、『こういうことがまだ足りない』とか『この次はこれを何とかしよう』とか、具体的な目標が出来るんですよ。」

コンペに始めて参加した年より2～3年は、予選でも何人も落ちて、なんとか本選に出ても周りに混ざって弾くのがやっと、全国決勝大会など「夢のまた夢」という時代がありました。自分の勉強不足、解釈の浅さ、普段のレッスン内容の甘さを強く思い知らされ、“勉強していかねばならない”という前向きな姿勢が生まれてきたそうです。コンペを「鍛錬の場」と位置付けている三好先生。しかし、それを心底楽しんでいるのが伝わってくるのです。

「教えていて、『あー、私って本当に幸せ。何でこんなにピアノが好きなんだろう!』って思っちゃうんです。普通のレッスンって、ハノン弾いて、エチュード弾いて、バッハを2声に分けてっていう作業みたいな感じでしょ。そのレッスンだと“幸せ”っていう感じが持てないの。ピティナの曲って、4つのスタイルに分かれているでしょ。たった8小節でも、突き詰めて突き詰めていくと、いろんな発見があって、面白くてたまらない。バロックのダンスの曲だったら、『プーレはね、ドレスは鯨の骨があったからこんな風にお辞儀するんだよ。こんな風に踊って。でもあなたのは…、豚のダンスじゃない』と子ども達といろんな会話が出来るし。クラシックになると、『モーツァルトはこんな性格だったからこんな風に弾いたんじゃないかしら』って言えるじゃない。ロマン派は『愛している人に振られて泣いているの、悲しいでしょ』なんてやると、まるでお芝居を教えているようで、すごく自分も楽しくなっちゃうの。普段の、『指立てて』『ひじ落として』『指番号違う!3、4、5…』なんて言って、それがだんだん出来るようになってくると暗譜して、マルあげて…っていう過程が退屈で、『私、何やってるんだらう』という気持ちになるんです。ただコンペに向けスタイル別のレッスンをやっていくと、『やっぱりハノンやんなきゃ、ダメだ』とか『チェルニー的なものが足りないんだ』『クラシックを制するものは全てを制する、いくらロマン派が得意でもやっぱりクラシックを上手にならなきゃ、ソナチネをやるよ』と、退屈だった教材にも使う意義が見つかるんですね。生徒達にも、『あなたはいつだってコンペで泣くじゃない、何で泣いたの?』『思った成績がとれなかったから』『何でとれなかったの?』『指が立っていなかったから』『じゃ、守らなきゃいけないのに、どうしてやらないの』『…』って三段論法で今の課題を意識させられるんです。」



お母さん方の熱意に苦しめられながら、一方ではその熱意に支えられて

「父兄、生徒、先生の3者が一体にならなくては参加できないコンペでは、いかにお互いの信頼関係が大切か」を実感されている三好先生は、生徒ばかりでなく、お母さん方との交流にも積極的です。料理の作り方を教え合ったり、ランチを食べながら子供の恋愛相談にのったり反抗期の作戦を練ったり。そしてコンペを通じて深まる絆は、その後のレッスンにより影響を与えてくれるそうです。

「本番間際になると、『もう2度とコンペなんてやらない!』って、泣いて叫びたくなっちゃう。ヒステリックになっている私を、生徒のお母さん方がなだめてくれたり、夕飯の時間も詰めてレッスンしていると商店街のお母さん方が各々夕食の差し入れしてくれたり。『この子、手が掛かるからおいてっちゃんおうかな』という気分になっても『あ、頑張らなくちゃ』って思うんです。」

「レッスン生活をこんなふうにしていきたいという理想を実現することが、こんなにエネルギーが必要で大変なこととは思わなかった」と言いつつも、それを楽しみながら前向きに努力される三好先生の姿こそ、三好先生の理想とされる生徒達の将来像なのかも知れません。



1曲を「よくもここまで…」と
思われる程、細かい表現やテク
ニクをマスターさせるんです

長沢 あけみ 先生

東京都八王子市

●ながさわあけみ/国立音楽大学ピアノ科および
ウィーンコンセルヴァトアールピアノ科卒業。
ピアノ指導歴22年。1986年よりコンペに参加。
連続9回指導者賞受賞。昭和音楽短期大学ピアノ科講師

今日は長沢あけみ先生の主催する「ファミリーコンサート」に向け、リハーサル形式のレッスンが行われることになっています。連弾合わせをさせたがるお母さん達の気持ちはよそに、子ども達はみな、じゃれ合ったり、追いかけてっこをしたりと、大はしゃぎです。そんな子ども達も、長沢先生のレッスンが始まると、ものすごい集中力と一生懸命さを発揮、天才少年少女に大変身してしまいました。

読む、書く、歌う、聴く、 徹底した基礎能力の育成を実施

現在長沢先生の正規のレッスン生は13名（幼児7名、小学生5名、中学生1名）。音楽教育の一環として活用しているコンペには、毎年レッスン生全員が参加しています。年長以上はみな全国決勝大会出場の経験者であり、しかもこの少人数でありながら、長沢先生は指導者賞を9年連続して受賞されている事実には驚かされます。

「少人数だからこそ可能なのよ」という長沢先生は、ピアノ学習を始める前に全員に、徹底した音感教育を施しているのが特徴といえるでしょう。

リハーサルの時間をちょっとお邪魔して、音感教育のレッスンを、一部拝見させてもらうことにしました。（右写真参照）

音感教育を取り入れている背景には、絶対音感を身に付けていなかったためにピアノを人一倍苦勞さ

れた長沢先生ご自身の体験と「自分の二の舞を踏ませたくない」という思いがあるのだそうです。一般に、耳の発達は6歳までとされているため、ここでは6歳以前の幼児はこの音感教育を受けることが、必修なのです。

長沢先生のきびきびとした熱っぽい指導と、それについていこうとする子ども達の必死の姿に、お母さん方も刺激を受けて必死にサポートしています。

このような音感教育で身に付けた読譜力のお陰で、ピアノを始めて1年もしないうちにソナチネを弾き、幼稚園の子でもパッハのインベンションを難なく弾いてしまうというのです！



▲「耳作りは、言葉作り・歌声作りから」
「どろんごさんの、ド…」と、歌詞と音名を合致させながら音列を記憶させる。歌唱後はメロディーを取り出して音程を矯正させる。非常に大きな声を発するのは、人前でも堂々と体中で表現できるように。

平常レッスンとコンペ中のレッスン、
「広く」と「深く」を使い分けて

「教材の進み方などは本当にいい加減なんです。譜面を見て反射的に指がパッと動けるようになるには、まず曲数をこなさないと無理ですよ。出来ないからといって、同じ曲を1カ月も2カ月もやっているんじゃ、子ども達は飽きちゃうし、第一、リズムもきちんとして、テンポも数えられて、音の長さも正確に…なんて、私は不可能だと思っているわけ。だいたい弾ければOKで、どんどんやっていくうちに不思議と力が付いてくるようですよ。」

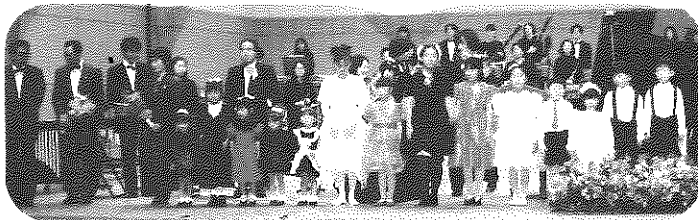
また、身体の発育に合わせ、弱い指を立たせるのに、トレーニングボードや紙粘土、秤などをうまく利用して、圧力のかけ方、脱力の仕方とも指導されています。

「生徒がまだ小さいうちは、初めから完全を期待していないんです。その時期に出来ることをこなしていけばいいと…。8歳過ぎれば、どの子も指はしっかりしてきますから。」

ただし、コンペや発表会の曲となると、効率よく急ピッチで進む平常のレッスンとは打って変わり、「1曲を“よくもここまで掘り下げて練習することが出来るか”と思われる程、細かい表現やテクニクをマスターさせます」と長沢先生。

飛び級受験はさせない方針なので、課題曲はどの子も余裕を持って取り組めるそうです。1カ月もあれば4曲の譜読みは充分で、その後の弾きこなしに時間を費やします。コンペ前のレッスンは、「いつでも好きな時間にどうぞ」とのこと。

「だって、仕上げに時間をかけないと、本番には出られませんよね。世の中には小さい子でも、技術



上写真：長沢教室の発表会は、プログラムが実に多彩。生徒1人1人が、ピアノ独奏の他に、独唱や室内楽、協奏曲等、各部門で日頃の総合的な音楽教育の成果を発揮した。

的にも音楽的にもびっくりする程素晴らしい演奏をする子がいますものね。例えば、体の使い方が上手で曲と振り付けに一体感がある子や、大きいフレーズを感じて弾いちゃう子が、幼稚園くらいの子でもいますから…」と、目標は常に高く持って指導されています。

「コンペによってピアノの上手な子が育つ」という前向きな姿勢で

「特に小さいうちは先生次第。大きくなるにつれ、自分の感性によるところが大きくなって行くけど、小さいうちは、本人が理解できるまでいかに根気強く練習につきあってあげられるか、つまり手をかけてあげられるかが、大切なのではないのでしょうか。」

長沢先生の教室に入門してきた子ども達は、音符1つ読めなかった、ごく普通の子ども達ばかり。そんな彼らを“0から育て上げてきた”という自信が、長沢先生の一言一言に感じられました。

「“生徒の恥は教師の恥だ”なんて思ってしまったら、コンペの良さを有効に使うことは出来ません。“コンペは上手な子供が出演するものだ”という考えよりも、“コンペによってピアノの上手な子が育つ”という前向きな姿勢で捉えることが、指導者として気楽に参加できるコツですね。」



▲カスターネットによるリズム奏
「時計のうた変奏曲」という1曲の中に、能力に応じて様々なリズムパターンが組み込まれている。腕をいっぱいにかし、体でリズムを感じさせる。



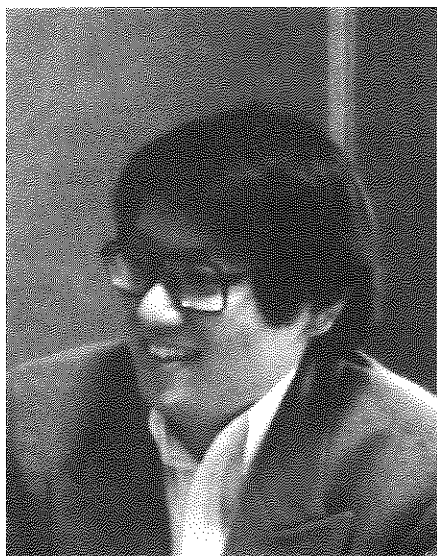
▲音感カルタ取り
カルタには、音名を連想させる絵が描かれている。例えば「シカ(泣いてる鹿の絵)」のカルタでは、「しかられた」の歌詞と「カシンドシラ～」を記憶させる。ピアノのメロディーを聴き分け、それを指すカルタを歌いながら取っていく。

ピアノは狭い家庭の中だけで弾く
楽器ではないことを実感してほしい

江夏 範明 先生

神奈川県大和市

- こうかのりあき／武蔵野音楽大学ピアノ科卒業。
ピアノ指導歴13年。1995年指導者賞初受賞。
今まで音大受験生を中心に指導されていたが、
今年はコンペ受験者全員の指導を本格的に手掛け、
多数の生徒を予選通過へ導いた。生徒数約50名。



「コウカ音楽教室」の門下生の中でも、今年大成
長を遂げた1人、佐藤麻理ちゃんは、今年の全国決
勝大会で、A1級金賞に輝きました。江夏先生とは、
麻理ちゃんがまだおしめをしていた頃からのつき合
いだそうです。この日、麻理ちゃんは、ある4つの
リズムパターンを各々何回練習したかを記録した表
を、江夏先生に提出することになっていました。
「見せてごらん」と言って、それを受け取った江夏
先生はびっくり。麻理ちゃんが手渡した表は、麻理
ちゃん自身がワープロで作成したものでした。

「え～！先生がやっとの思いでワープロを覚え始
めたのに…。小学生の子が使っちゃうわけ！？麻理
ちゃん、すごいね！」感激する江夏先生に、ちょっ
とおませな麻理ちゃんは涼しい笑顔を送りました。

「今週はワープロに夢中になりすぎて、肝心の練
習は…」という不安は、レッスンが始まると、一瞬
にして消えました。驚いたことに、麻理ちゃんの楽



譜にはどれも「I→IV→V…」等の和声進行が記入
されています。そして「近親調」「借用和音」とい
った、小学生には難しいのでは…と思われる用語を
バシバシ使って、江夏先生はこの曲の調の流れを説
明します。麻理ちゃんが弾く傍らで、

「そこはIV度、開いて！」

「それじゃ、音楽のふたが開きっぱなしだよ。」
と、こんな指示が出されます。

実はここに、江夏先生門下生の今年の大躍進の理
由があったのです。

左手の和声だけで音楽を作ってみよう

「ハーモニーで歌う」が功を奏す

「昨年の地区予選の演奏を聴いて、ハーモニーの
流れが音楽的でない不自然な演奏の多いことに気付
いたんです。指はよく動いているし、メロディーも
よく歌えている。でも和声的な音の処理がめちゃく
ちゃで、なんてもったいないことかと…。僕自身も
今まで、カデンツなどは“ある程度頭が出来てから
じゃないと、無理”と思っていたんですが、やはり
小さい頃からカデンツの“開く”“閉じる”響きを
徹底的に身に付けさせないことには、いつまでたっ
ても歌えないんですよね。右のメロディーを歌うの
は当然ですが、“左手の和声だけで音楽を作ってみ
よう”と考えたら、これがうまくいったんですね。」

小さい生徒さんには、今まではあまり理論的なも
のに目を向けていなかったのですが、今年はコン
ペ前から、週に2回、ハーモニー作りのために楽典
的なレッスンを設け、特訓をしたそうです。

上手に弾けたら、「9.0」で讃えてあげた方が 子供は応えるんですよ

「課題曲の選曲は、まず全部さらわせてからにしています。」と江夏先生。日頃のソルフエージュの訓練があつてか（奥様の祐子先生が担当）、譜読みは難なく行くとのこと。そして、春に開いている発表会で、その中の1曲を試し弾きさせ、各々の課題曲を絞り込んでいくそうです。

「特にB級くらいまでは曲が短いので、何カ月も同じ曲をやっていくのが飽きちゃうんですよ。で、弾けばうまくなるってもんでもないの、色々工夫が必要になってきます。

例えば、1曲を4曲に分けてしまう。8小節弾いてこれで1曲。それ以上は弾かせません。その1曲を弾かせ、例えば『7.5』などと点数をつけてあげるんです。よく弾けたときには、普通に誉めるよりも『9.0』っていう方が、なぜか子供は応えるんですよ。『じゃ、来週は次の2曲目（9小節～）。これも9.0を目指して』と言って気持ちをのせていくんです。」

“1つ1つのフレーズがいかに魅力のあるものにするか”を目指し、1曲を細分化させ、そのフレーズの中での和声の流れを理解させたり、物語を作ったりしているそうです。「物語」は、生徒の個性や興味に合わせた、江夏先生と生徒との共作なのです。

「僕が弾いて聴かせてしまうと、真似をするにとどまってしまうんですよ。演奏しているところを横で『～は、～でした』などとアナウンスして、曲のイメージを作らせているんです。弾き方のおかしいところは、ストーリーや話し方を変えてしまう。すると、『あ、こうじゃないんだ』と実感するみたいですよ。」

こうして最後の小節までたどりつくと、「貼り付け」作業に入ります。譜読みを終えて以来初めて、全曲を通して弾くことができるわけです。

コンペ中の生徒同士の交流によって、 先生と生徒の心の壁も取り払われた

「今、先生の転んでた～！」

「じゃ、麻理ちゃんは転ばないでやってみて。」

こんな会話でレッスンが進行していくのですが、麻理ちゃんに限ったことではなく、どの生徒さんともそんな間柄なのだそうです。

「音楽は、まず自分の思っていることを出すことから始めたい。心の壁を取ってやらないと。音楽は

心から出てくるものだから」という江夏先生にとって、これは願うところ。江夏先生の大らかでひょうきんなお人柄によるところもあるでしょう。しかし、この夏の生徒さん達との交流にもあるのです。

実は、予選が始まった頃から本選までの約1カ月間、朝9時半から夜遅くまで、級別のグループレッスンを毎日行っていました。もちろん、強制ではないのですが、殆ど全員、毎日通ったそうです。

「同級の子も達が集まって、少し仲良くなってきた頃を見計らって、レッスン室に入るようにしていました。」

グループの中で子ども達が打ち解け合い、それに乗じて先生との心のつながりも日に日に強くなっていきました。

レッスンは、グループのみんなを同時進行で進めていきます。あるフレーズについて、よく弾けている子と弾けていない子を、さりげなく比較させながら、自分の今の課題を悟らせていく方法は、楽しい雰囲気を作りながらも、親の注意を向けるにも非常に効果的で、翌日には生徒達はみんなよくさらってきてくれていたそうです。

「毎日毎日生徒達に接することによって、1人1人の今まで見えていなかった部分がよく分かるように



上写真：今年の全国決勝大会進出者の皆さん

なったことは、コミュニケーションをする上で有益でしたね。」

取材の途中、「ねえ、聴いて聴いて！」と言って、可愛らしいピアノ演奏を披露してくれたのは、江夏先生の長女の真理奈ちゃん（5歳）です。そんな無邪気な真理奈ちゃんを愛おしそうに見つめながら、江夏先生はおっしゃいました。

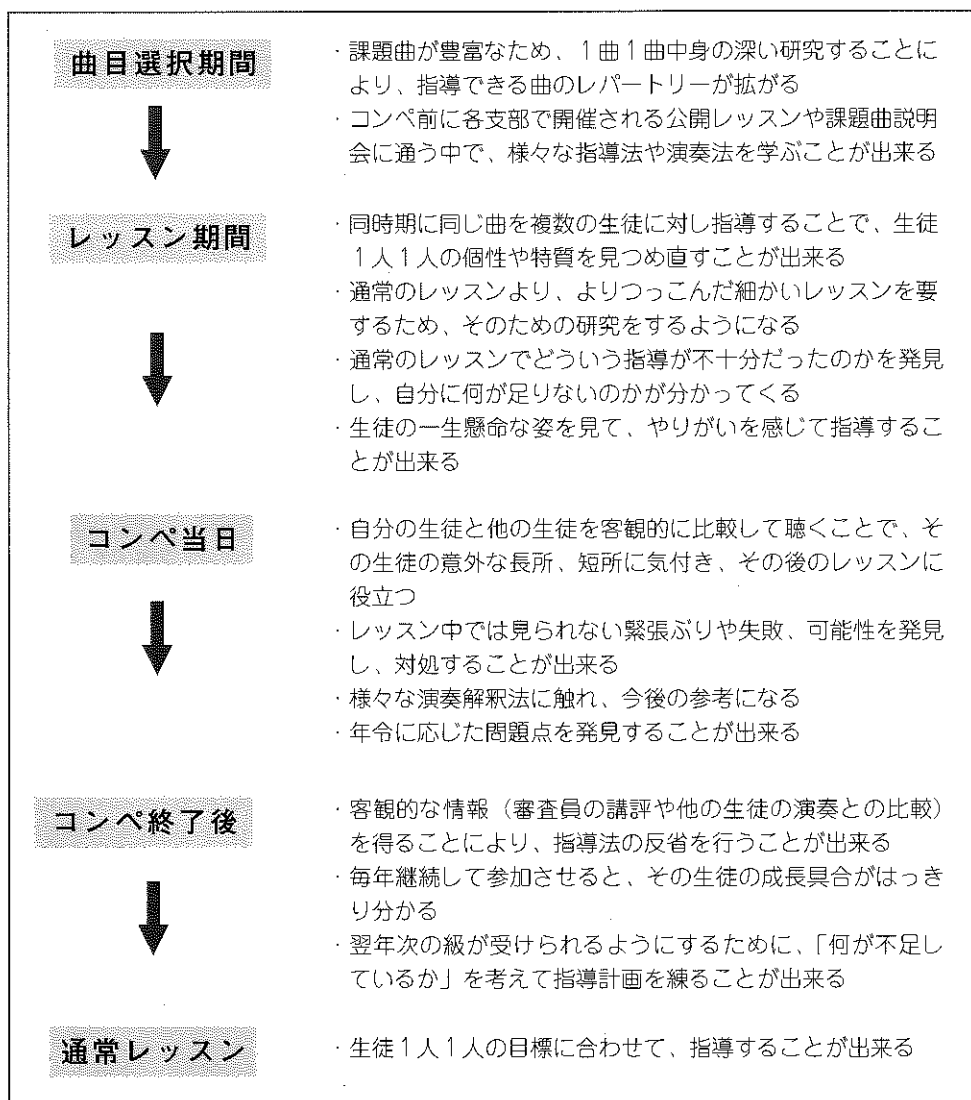
「私がコンペに積極的なのは、子ども達に人前で弾くことに喜びを感じてほしいからなんです。ピアノを学習しているお子さんの多くは、人前で演奏することに恐怖を感じている…これは残念なことですよ。コンペの経験を積むことによって、弾く喜び、聴かせる喜びを肌で感じてもらいたいし、ピアノは狭い家庭の中だけで弾く楽器ではないことを実感してほしいんですよ。」

コンペティションで、指導者が得るものとは？

「ピティナのコンペティションは、生徒以上に私たち指導者に与えられた勉強の場であると思います。毎年生徒を通じて反省させられる点が多々あるが、どの点も、生徒以上に指導者である自分の欠点が多く思えます。自分を向上させ、より良い指導者になるべく、今後もコンペを継続利用しながら今まで以上に勉強を重ねていきたい。」

という斉藤桂子先生（新潟市）をはじめ、「指導者の勉強の場」と捉えている先生は多い。

では、コンペティションを継続利用されている先生方は、どういう点が勉強になると感じているのか？レッスンの過程別にまとめた。



全ての過程に「勉強の場」がある。「自分のために」という意識こそ、コンペティションによって指導力を高める不可欠な要素であり、これが生徒に跳ね返ってくるのである。

パスティン・メソッド等の講座で講師としても活躍されている湯本先生は、東京支部主催の「音楽教材研究会」の会員で、長年勉強を続けていらっっしゃいます。この研究会や会員の仲間から得た情報は、レッスンに直接役立つことが多いそうです。

今日のレッスンでも、アイデア豊富な様々な教具を、テキパキと活用し、幼い子供達の興味をひきながら指導されていました。

湯本 早百合 先生 ● コンペ参加歴14年・埼玉県浦和市在住

「コンペ参加が定着した今は、私が生徒に頑張らされている感じです」



コンペティション継続参加の原点◎その2

コンペティションで、生徒を伸ばすには？

「コンペティション」という1つの体験によって、ピアノの能力を伸ばしている子と、逆にピアノ離れを招いてしまった子がいるのは、なぜだろうか？単に、コンペティションに向き不向きの問題なのだろうか？

コンペティションを継続利用されている先生の、これまでの成功例や失敗談をもとに、「生徒の力を伸ばす」という本来のコンペティションの在り方を正しく有効に活用する方法を考えていきたい。

<Point 1>

生徒1人1人の課題設定を明確にし、成長を認識させる

「ピアノ学習者の内、才能のある人と全く向かない人は極少数で、指導次第である程度上手にも下手にも変化していく人が大半。人と争うのではなく、あくまで自分自身の上達のために参加させています。一部の能力のある生徒しかコンペに出さない先生も多いようですが、いくら才能のある子に力を注いでも、他の子供達の能力は少しも変わっていかないというのでは問題。」と、どの子もその子なりに上達させてこそ指導者といえるのではないかとお考えになるのは、秋谷和子先生（宝塚市）。才能のある学生を発掘することを目的とした他のコンクールとの違いを、まず明確にしたい。

大半に位置付けられる子供達がコンペティション参加の目的とするものが、「～賞入賞」「～大会進出」というものさしのものだけでは、入賞しない限り、達成感を味わうことなく「選ばれなかった」という思いだけが残ってしまう。

そこで、継続して参加させるには、生徒1人1人に適切な課題設定が大切になってくるのだ。

「今後どのようにして向上させ希望を持たせていくか、コンペ後の生徒へのフォローが一番大切だと思います。」という、山路三千子先生（鹿児島市）の意見の通り、コンペティション終了後の対応がポイントだ。

どのように、対応されているのか？

「コンペが終わると、前年と比較して良くなった点や人の演奏を聴いて勉強になったこと等を、生徒とじっくり話し合い、目標を立て、来年のコンペに向けてレッスンに入ります。」（諫早市・江藤美穂子先生）

「コンペの演奏を全てビデオに撮り、入賞等を文字入れした上で生徒達に配り、どの様な演奏が良いのか悪いのかを生徒自身に判断させ、また同級全体を聴き比べて自分の演奏を反省させています。」（松山市・山本利昭先生）等など。

来年のコンペに向け課題設定する際、「講評」を役立てているという先生は多い。

「日頃のレッスンで、こちらからいくら問題点を指摘し続けても、今一つ効果が出ない場合が多いのですが、コンペに参加して審査員の先生方のアドバイスにより、生徒も親も納得して弱点を知り、次の1年間への勉強の目標にしてもらえることがよくあります。」と中田元子先生(大阪市)のご体験の通り、弱点を納得させるのに、講評のパワーは大きいようだ。このような子ども達の性格を逆に利用し、

「コンペでよい成績を取っていた生徒が伸び悩んでしまったことがあり、考え方を改めました。生徒の演奏に下駄を履かせるようなその場限りの指導ではなく、演奏の質を生徒自身が考えていく力を付けさせる指導が出来ればと…。どの級であろうとも、1から10まで教え込むのでは

なく、たとえ技術的にも感受性の面からも幼さや未熟さが残っていても、敢えて日をつむり、コンペに送り出してしまうのです。その結果は当然、審査員の採点と講評に素直に出てきてしまいますが、それによって、生徒自身も親も、より深く考えるようになってくれれば良いのではないかと思います。」と山良佳久先生(千葉市)。あくまでも「生徒の力を伸ばす」ことを主体に考えた活用だ。

他人との競争に勝つことではなく、自分自身の成長を知ることで達成感が得られるよう、導きたい。課題や目標という、目指すべき内容と方向が明確であればある程、結果が出た時に、「1年間で自分が何をどれだけ成長したか」が掴みやすくなるはずだ。逆に、生徒の成長の内容が明確でないと、他人との比較という相対評価でしか、判断できなくなってしまうのだ。

<Point 2>

通常のレッスンとの違いを、プラスにする

コンペ中のレッスンは、通常のレッスンとはかなり異なった性格がある。「練習曲が進まない」「同じ曲ばかりで生徒が飽きてしまう」等、コンペ中のレッスンをマイナス評価する前に、プラス評価で考えてみてはどうだろうか。

1) 同年代の同じ曲の演奏を聴く価値

通常のレッスンでは、自分の演奏に対し、先生の評価や先生の手本との比較の他に、自分の演奏を客観的に捉える手段はない。「自分と同年代の子が自分と同じ曲を演奏する」のを聴く機会等、稀だ。同じ曲を比較して、感じる・考える体験は、言葉で伝える以上に威力があるか

もしれない。聴く耳を育てること—これも指導者の役割の1つではないだろうか。上手下手のレベルでなく、「どういう点が良いのか悪いのか」や「解釈の多様さ」を教えてあげたい。これも演奏と同様、年月や経験を要する教育であることは間違いない。

教室内の聴き比べにとどまらず、コンペ会場に生徒と足を運んだり、他の教室との合同レッスンを企画するなど、チャンスは広げたい。

2) 1曲を掘り下げて勉強できる価値

「日頃のレッスンではなかなか細かい音作りが出来ないので、コンペの機会を利用していま

レッスン室の壁にびっしりと飾られている生徒達との記念写真に、生徒への愛情が伝わってきます。

よく笑い、よくしゃべり、よく歌う…。何時間にも及ぶレッスンの間、常に横山先生のテンションは高く、一生懸命でした。「私、B型なんです」とは言うものの、生徒1人1人に対するレッスンの準備や事後記録の完璧さに、几帳面な一面を感じさせられます。「曲探しが趣味」という横山先生。生徒達のレッスン曲も、実にバラエティー豊かでした。



横山 真子 先生 ● コンペ参加歴10年・千葉県柏市在住

「楽器店で密かに見つけた曲が、翌年課題曲に…ちょっとガッカリですね」

先生のレッスン宅は、お寺！休日には、お寺からジャズやシャンソンが聞こえてきます。

守先生は作曲科出身で、その持ち味を生かし、即興演奏や作曲、ジャズ等の指導にも意欲的に取り組まれています。(写真は伴奏付けのレッスンの様子、及び某生徒の作詞作曲の自筆譜！)

発表会では、我が子の作曲した曲を聴き、お母さん方は感激の涙を流されるとのこと。日本歌曲の主題を基に6人で弾いた即興演奏も、大好評だったそうです。



守 麗子先生 ● コンペ参加歴14年・千葉県木更津市在住

「今まで見えなかった子供達の心や素晴らしい音楽に、ハッとさせられます」

す。」という稲垣千賀子先生(川西市)。特に、ピティナ独特の「4スタイル」の同時進行のレッスンは、時代様式にまでつつこんだレッスンがしやすいようだ。

「課題曲を練習中は4スタイルの曲を同時に

練習するので、不得意なスタイルも勉強できる。普段のレッスンではこの辺でと次々と進むことがあっても、コンペの日まで4曲を繰り返し深く練習することによって、かなり力が付いていきます。」との意見も多数。

<Point 3>

「舞台」という特殊な経験を、日常のレッスンに生かす

コンペに参加するとなると、「張り合い」や「緊張感」を持って練習やレッスンに臨む生徒たち。この感覚は、少なからず、コンペ当日の舞台経験に起因しているようだ。

同年齢の人達の前で演奏する時の「みんなから落ちこぼれたくない」という感情。審査員の先生方前で演奏する時の「自分をより良く評価されたい」という感情。あるいは「注目される」喜びかもしれない。このような非日常的な体験で得た緊張感、集中力の記憶は、子供たちの気分を変えることができる。必要に応じて、蘇らせてあげると効果的かもしれない。

また、「特定の目に向けて仕上げる」ことは、生涯を通じて多いもの。

「特定の目に向かって高めていく…という作業を毎年繰り返すことによって、精神力も養われ、演奏会に向けて曲を仕上げしていくコツを少しずつ飲み込んでいくように感じます。これは、1回2回の経験とか、何年に1度の緊張では掴めないことだと思います。」と横山真子先生(柏市)。

「出来るようになったら、次の曲…」という受け身な進み方では、自立できない。時期を見て、計画的に練習する姿勢が身に付けさせることが、自主的に能力を伸ばすことにつながるはずだ。

●ご協力頂いた先生方(五十音順・敬称略)

秋谷和子(宝塚市)、池田奈甫子(上浦市)、稲垣千賀子(川西市)、岩佐生恵(今治市)、漆原好美(宮崎市)、江藤美穂子(諫早市)、大林裕子(名古屋市)、太田ゆかり(倉敷市)、川口由紀子(佐世保市)、江夏範明(大和市)、江夏祐子(大和市)、斉藤桂子(新潟市)、阪口姿子(熊本市)、佐野幸枝(横浜市)、添田みつえ(双葉郡)、瀧塚順子(那珂郡)、田中京子(久留米市)、辻紀子(徳島市)、長沢あけみ(八王子市)、中山元子(大阪市)、本田綾子(江津市)、三好のびこ(藤枝市)、村上瑞枝(三原市)、守麗子(木更津市)、山路三千子(鹿児島市)、山田つづみ(津市)、山本利昭(松山市)、湯本早百合(浦和市)、山良佳久(千葉市)、横山真子(柏市)